

1986 年度学会賞受賞作品・授賞理由

◆論文賞「筑波研究学園都市におけるマスタープランの策定過程とその機能・役割に関する一連の研究」

若林 時郎(九州芸術工科大学工学部教授)

〈選考理由〉

本研究は、著者が計画者として又そこに居住する研究者として、長年にわたって関わってきた筑波研究学園都市について、その計画プロセスおよび都市形成過程を継続的かつ詳細に研究して来た一連の研究の成果とその集大成である学位論文からなっている。

ここで扱われている計画策定過程の記録・資料は膨大であるが、著者のマスタープランに対する問題意識・研究の枠組みにそって体系的に整理されている。その結果、筑波研究学園都市のような複雑な機能を持ち、多様な主体が係わり、建設過程が長期にわたるような事業において、マスタープランが果たすべき機能と役割という計画技術のきわめて本質的な問題に迫る知見を明らかにしている。

また、筑波研究学園都市の都市形成過程について、民有地の市街化過程、居住者の意識と行動など、あらかじめ計画的に扱いにくい問題までふみこんで調査・分析している。その結果をもとに提出された土地利用コントロールや定住化へむけての考え方などは計画の事後処置として説得力がある。

以上に述べたように、本研究は実証的研究としても理論的研究としても優れたものであり、都市計画学会の論文賞にふさわしいものと判断した。

◆計画設計賞「世田谷区における桜丘区民センター広場をはじめとする一連の都市デザインプロジェクト」

大場 啓二(代表 世田谷区長)

《選考理由》

近年、都市景観行政は全国的に目ざましい展開をみせているが、本件はその中でも先導的であつ、着実な成果を上げている事例である。

世田谷区は昭和49年の自治法等改正以後、各種権限の都から区への移管に伴い、住民に最も身近な基礎的自治体として地域に密着したまちづくりを着実に推進してきた。すなわち、区基本計画に基づく重点事業や各種まちづくりに新しい「都市デザインの視点」を導入し、昭和61年には、(1)桜丘区民センター周辺プロムナード、(2)梅ヶ丘中学校前歩道、(3)用賀プロムナード、(4)馬事公苑前けやき広場等一連の都市デザインプロジェクトを完成させた。これらは、ユニークなアイデアに基づき、自治体・住民の共働の成果として、デザイン水準の高い都市景観を達成しており、都市デザインがまちづくりの一手法として確実に効果あることを証明している。一方、これらのプロジェクト展開の為の準備、啓蒙活動として昭和55年には、区内在住在勤の学識経験者による「都市美委員会」を設け、昭和57年には全国に先駆けて区役所内に「都市デザイン室」を設置し、昭和59年からは一連の「都市美啓発事業」として、(1)「せたがや百景」の選定、(2)「せたがや界限賞」の設定、(3)「都市美シンポジウム」の開催、(4)「都市美せたがや叢書」等の出版を行ってきた。

大場啓二区長は、この道程を通じて都市デザイン室をはじめとする機構整備と、スタッフの養成による活動の展開、区内在住者を中心とするブレインを組織し、それらの提案を大胆に取り入れて、指導性を発揮してきた。

以上により、大場啓二区長を代表として世田谷区のプロジェクトは計画・設計賞に相応しいと判断した。

◆石川奨励賞「換地計算法に関する体系化」

山本 哲(中央コンサルタント(株)取締役会長)

《選考理由》

土地区画整理は都市計画を実現するための有力な整備手法のひとつとして、従来より実施されているが、減歩という独特の技法をもっているため、この減歩をいかに理論的に説明するかが、一番難しい問題となっている。このため、合理的な換地配分

理論が必要とされるが、従来用いられている各種の換地計算法は現場の専門家中で、それぞれ地域的に経験的に工夫され、発展してきた。

本研究は、土地区画整理の換地計算法に関して、(1)原理的な分析・解明、(2)比較法による解明、(3)体系的分類と位置づけという三つの点から検討を進め、かつ、土地区画整理は具体的には増価を実現するものであり、換地配分は、その増価を配分するものであるという考え方に基づいて新しい換地計算法を提案している。

本研究はなお検討すべき課題も残っているとはいえ、都市計画の現場で長年活躍された技術者が従来現場の土地区画整理の専門家でなければ経験的に分からなかった換地計算法に関して、全国における実態を把握するとともに、各種の方法の原理を数理的、系譜的な点から考究し、理論的に体系化を図ったことは、今後、都市計画の科学化の上で高く評価でき、その発展に大きく寄与するユニークな研究であり、石川奨励賞に値するものとする。

◆論文奨励賞「通勤交通手段別需要推計手法に関する基礎的研究」

新田 保次(大阪大学工学部講師)

〈選考理由〉

受賞対象となった研究は、著者の学位論文であり、約10年間にわたり蓄積した研究の成果をとりまとめたものである。

本研究は、交通計画上の重要テーマである通勤交通を対象とし、主として、需要推計手法に関して実証的な検討を加え、いくつかの実用性の高い手法の提案を行ったものである。

1. 交通需要推計の基本となる生成交通量の推計について、産業構造の重要性を検証し、この要因を組み入れた推計手法を示した。
2. 交通手段別交通量、経路別交通量の推計において、所要時間、費用、乗り換え回数等の要因を組み入れた一般化時間を変数とする選択モデルを提案し、駅選択行動への適用性が、高いことを示した。

また、一般化時間の算定に必要な等時関係数について、交通手段を含めた各種の移動状況別に具体的に把握し、係数の性質を検討した。

3. 新しい交通施設の利用者を予測する手法として、意識データを用いる転換モデルを提案し、急行バス、有料自転車・バイク駐車をケースとして、適用性が高いことを示した

以上のように、本論文は、主に通勤交通を対象として一般化費用係数転換意識モデル等の新しい概念を適用して需要推計手法の改善の提案と実用化を試みたもので、その結果は、交通対策、交通システム改善上、益すること大であり、交通計画、都市計画上有用で、学術上、実用上寄与するところが大きいと思われる。よって、本研究は論文奨励賞に相応しいと考える。

◆論文奨励賞「既成市街地における高齢者の地域の実態と居住類型に関する研究」

山本 暢子(日本学術振興会特別研究員)

〈選考理由〉

わが国の21世紀へ向けての大きな時代潮流のひとつとして、高齢化社会の到来がある。高齢化社会の問題に対しては、近年多くの分野で、様々なアプローチから研究がなされている。居住に関連しても、建築学の設計計画等の単体レベルでの研究や、社会福祉分野での扶養・介護の面からの同居・近居等に関する研究が進められている。

しかし、高齢者の居住の問題を地域として捉え、分析し、地域上の課題として検討した研究は、これまではほとんど無かった。

本論文は、地域における高齢者を含む世帯の居住状況を東京区部(実態調査は山手戸建専用住宅地、下町商住混合地区、木賃アパート密集地区)について実証的に分析し、それぞれの地域の都市計画上の課題を明らかにしている。高齢者問題を扱うことから、当然のことながら、単に物的側面の研究だけでなく、高齢者の住生活等へのソフトな面の研究にも眼を注いでおり、貴重な研究と言える。都市計画の立場から具体的施策へとつなげてゆく研究としては、いまだ基礎的研究と言わざるをえない

が、今後一層深刻化するであろう高齢者問題を研究する上での着実な第一歩として、論文奨励賞にふさわしい業績と考える。

◆論文奨励賞「区部住工混在地域における「新たなる混在」の評価と環境整備」

中出 文平(東京大学工学部助手)

〈選考理由〉

主として東京都区部の住工混在地区における用途の面から膨大で詳細な実態分析と各種アンケートによる地区内関係者の意見の分析によって住工混在地区の実態を明らかにしているさらにフーバー以来の混在・多様化の価値論との結合を図り、「新たなる混在」という概念を提出して、住工混在地区研究に新しい視角を与えた。

とくに従来の住工混在地区研究が、地区の現状(ストック)中心に分析し、対応策を示していたのに対し、本研究はこれら地区の近年の顕著な傾向である変化動向(フロー)を積極的にとらえている点に特色がある。

わか国の住工混在地区が土地更新能力が高いこと、またマンションを中心とする住宅の立地が主として工場側に地区外転出を促進することなど特異な現象を持っていることか指摘され、多様性を持つ市街地の再評価を行っていて、今後のわが国の市街地形成に大きな視点を加えるものと評価し、論文奨励賞に相応いと考える。